

令和3年7月5日発行(毎月5日1回発行)

第61巻7月号(通巻744号)

風土



7

わが作のラジオ洩る夜の蜷汁

(句集『含羞』より昭和二十八年作)
これは、NHKのラジオで、桂郎師の小説『続剃刀日記』が放送されたときの句です。その前にも『剃刀日記』がNHKで放送されています。この放送のおかげで、目黒書店より『剃刀日記』再版発行、更に創元文庫からも『剃刀日記』が刊行されています。NHK俳人というより、作家としての名声が先行していますが、桂郎師としてはまんざらでもありません。桂郎師は、「蜷汁」を啜りつつ、ラジオのわが作に耳を傾けるのです。

ひとり酔ふ岩魚の箸を落したり

(句集『含羞』より昭和二十八年作)
「谷川温泉」の前書のある句の一つで、「馬酔木」の谷川温泉の鍛錬会で作られたものです。桂郎師は昭和二十三年に「馬酔木」同人として復帰しています。この「ひとり酔ふ」は、みんなが句作に一生懸命な中、ひとり背中をむけて酒を酌んでいるのです。この天邪鬼な性格を、波郷は「桂郎さんは宿の女中さんの尻を詠んでいればいいんだよ」と言ったとか。

春満月ノアの方舟近づけり

(句集『氷輪』より平成十八年作)
器師にとって「月」は特別な存在で、死者の魂の棲むところなのです。そのことを私たちは、例えば句集『貴樞』の「寒満月妻のぼりしあとのなし」で確かめてきました。ですからこの「春満月」も死者の魂の世界です。器師はたつぷりと水気を含んだような「春満月」を眺めるうちに、「ノアの方舟」を連想したのです。乗っているのは人々や動物などではなく、地球上の死者の魂です。「ノアの方舟」は死者の魂を運ぶ舟なのです。

神輿庫ねむらせ月のさくらかな

(句集『氷輪』より平成十九年作)
この句には「京・丸山公園」の前書があります。この句も「月」を詠んでいます。この句は「さくら」との取り合わせになっています。「丸山公園」の「さくら」と言えは枝垂桜です。その近くには祇園祭に関わる八坂神社があります。この「神輿庫」には祇園祭での神輿が納められています。今、枝垂桜の上に春の月が上り、妖艶とも神々しいとも言える世界が現出しています。そして「さくら」には死者の魂が棲みついています。この句は「さくら」の死者の魂が、同じく死者の魂の棲む月の光に誘われて遊んでいるとも読めます。

花御堂

南うみを

夜あがりの雲湧き立たせ春の山
あをあをと水の若狭の水草生ふ
うららかや媪短く鋏つかひ
また一つ田の畦ひかるつばくらめ
一陣の花びら入江渡るなり
水揚げや鱈のひかり床走り
朝ざくら一番糶の声挙がる
散る花へ湯気噴き上げてかまぼこ屋
若狭の子渚伝ひに花まつり
童女に仕上げの椿花御堂
まんべんに入江ひかりて花御堂
糶声をとほくに甘茶灌ぎけり



竹間集

同人作品



五月

中根 美保

行く春や業平竹のほつそりと
五月来と槌で割りたる塩の塊
川中の飛石渡る五月かな
柿若葉箱階段の黒びかり
芍薬の内よりひらく力かな
十葉の殖ゆ戦陣を組むごとく
一角は雪の白さや薔薇の園

天落つる

間島あきら

天落つるとふ人ありぬ桜葉
燕来る空の十字路渡るごと
花は葉に志太一郡の深ねむり
啄木の柳かぜ抱く志太郡
花まつり案内板に鬼の面
鳥雲に郡衙出土の円面硯
海はしる太き日柱夏来る

花守の杖

内藤 静

花守の杖上弦を呼び出だす
靖国のに簷に白鳩花ぐもり
逃水や鎌倉古道公事道
桜蕊降るよスコアはゼロとゼロ
鳩・雀・鴉も参ず仏生会
永き日の笑ひ閻魔と怒る閻魔
亀鳴くや祖おやの化石を思ふとき

劍 玉

土井ゆう子

濠の面に触れんばかりの桜かな
ひろひらとスカート裾水温む
青き踏むフォークダンスの輪の縮み
二胡を弾くひとりは若き朧の夜
牛の臥す態の岳見えのどけしや
しやぼん玉子らの望みの次々と
赤と青の劍玉貰ふ昭和の日

田螺鳴く

浜 福恵

一人静の花やすつくと手を挙げて
瑠璃光如来の御手をこぼれ筆胆
春惜しむ野に咲く花のむらさきに
蛇穴を出でて古庭の岩の上
沖の小島の四月や海猫の抱卵期
春満月読経の息の切れ切れに
枕は低くして休めよと田螺鳴く

牡 丹

森 高 武

美味さうな所より折れ初蕨
蛇穴を出づ叫声のこだまして
山桜小さき漁港の造船所
春障子開け雨の音確かめぬ
額の絵の少女と話す春の昼
運動の後は豚カツ春キャベツ
大輪の牡丹を切れば雨兆す

日 永

門伝 史会

山脈のやさしくなりし日永かな
逃水や逆さまに見る道路地図
遠嶺の空の奥まで山ざくら
佇みて歩いて惜しむ豆ざくら
水芭蕉空に水音響きけり
囀の真ん中におても忘れ
羊羹の幅の不揃ひ蝶の昼

春の露

鈴木 石花

玄関に外出を待つ春日傘
前山の中腹灯す山さくら
みはるかす城跡の山花の雲
「露毬」と言ひしは恋ふ春の露
死ぬ気無き遺言状あり四月馬鹿
極楽へ念仏申す円光忌
逝く春の花柄大き衣仕舞ふ

花水木

山田 暢子

花水木見て自転車の向きかふる
風五月寂れし街となりけり
立夏かな二年目となりコロナの禍
散らかりし机上に少し若葉の香
柏餅二つで足りて我が家かな
年金の暮らし胡瓜の花ひらく
風光るひかりの中へ出て行けぬ

花冷え

岩木 茂

風穴の奥に沖あり花の散る
十歩否二十歩離れ花仰ぐ
外から見るか内から見るか紅しだけ
枝分けてしだけざくらの幹覗く
たましひの遊び疲れて花の散る
花冷えの御座岩に日の降臨す
吊橋に残花の風の吹き上る

聖五月

田中佐知子

雉子鳴くや味土野も奥の女城址
砲台山にナホトカ広場露を摘む
聖五月樹々は光を降りこぼし
万緑や陰影深きマリア像
蛇苺おのずからなる径途切れ
かぎろふや学舎あとも紀の川も
夏燕消え紀の川の滔々と

花筏

中村 洋子

花筏水に剥がれてゆきにけり
花明かり水明かりして花曇
嵯峨御所の雅を今に紅しだけ
アネモネ咲く木椅子に雨の湿りかな
逆光の波のひとすぢ鳥雲に
斑鳩の裳階の塔に雀の子
春ともし手燭に浮きし岩屋仏

ゆく雁

橋添やよひ

糸遊や金閣池に炎上す
猿田彦の車の軋み仏生会
二枚葉の香りや嵯峨の桜餅
なからぎのみちを抜けて花衣
歩くことは生きることなり花ふぶく
春日傘疲れをたたみ蔭に入る
ゆく雁や透きし机のインク壺

城垣石の夢

浅田 光代

すみれ草咲かせ城垣石の夢
たんぽぽの絮を吹きあふ間柄
ひととところ激しき揺れや山桜
ひと匙の粥のひかりや朝ざくら
天上に別の青空揚雲雀
春昼のバスに乗りそこねたる顔
叡山の風になびきて苗代田

霾ぐもり

柿沼 盟子

花冷えや念念校に赤を入れ
境内のあをまさりゆく仏生会
春月や草はひのぼる石畳
トースターの止まりて雲雀高きかな
桃色の目薬さして春北風
残る鴨翔つや野太き声放ち
回送車つづく昼前霾ぐもり

初 燕 高村 令子

生きてたか元気でいたか初燕
友の来る声届かねば日傘揚げ
筈に世間話がついて来る
雀等の声を濡らして菜種梅雨
無人駅昏れて木椅子の花湿り
麦秋やおんぼろバスの定期便
連れ舞へる白蝶命二つかな

林檎咲けば 土井 三乙

花冷のガラスの扉押し出づる
鈴懸の枝のにぎはふ鳥の恋
雲雀野や躓きたるも歩数にて
山笑ふ老の懸垂スクワット
かたくりの花や見るべししやがむべし
長閑なりペンをカップに持ち替へて
林檎咲けば妻に津軽のことば増ゆ

風みどり 林 いづみ

リメイクの真珠十粒蛸蚪生る
十指跡ふはとのこさぬ春手套
塀際は野良猫通路日の永し
亀鳴くや無人求人誌並ぶ
插花に添ふあしらひの姫うつぎ
祥月の母に剪りけり白牡丹
風みどり一袋づつ買ふ土と種

小賀玉の花 小林 共代

花小賀玉の香る愛親覚羅邸
杜若業平振りに揃ひけり
松の花左千夫生家の通し土間
乗つ込みの鮎釣り上げて手で外す
行く春やことばの分かる犬とぬて
亀鳴くや仏間に亀の寝てゐたり
春夕焼真砂女の海の黄金色

山河集

同人作品



南うみを選

畑ぬけて龍太の墓や葱坊主 奥田 茶々

和宮降嫁の道の葱坊主
かき餅のすぐにくらみ花曇り
海賊船に優先席や山笑ふ
湿原の風に白帆を水芭蕉

谷田明日香

田の神の息吹きうなじに芹摘めり
山水を含めば甘し芹すすぐ
植糸し田の真つ只中に古墳丘
深山田の光り出したる卯月かな
水の香に潮の香混じる田植糸かな

山田 健太

姿見のカバーのほつれ花は葉に
たましひの揺れのはじまる夜のさくら
ラムネ抜く泡噴かぬことやや癪に

棹立ちの馬の瞳や春水
みづうみや木椅子の端に蟻が出て

仙田 孝子

縄文の横穴塞ぐ鬼蕨
メモ帳にレシピの増ゆる豆の花
咲き終へし水仙葉もて括らるる
閉門の四時の明るき躑躅寺
挿床に背の低きまま蕾持つ

渡辺 やや

木道は片側通行蛸蚪群るる
若沖の墓ゆ尾の出で瑠璃とかげ
風光る一閑張りの万華鏡
花みかん香る坂道日の眩し
一人居の自由不自由暮の春

風土独語／南 うみを



畑抜けて龍太の墓や葱坊主 奥田 茶々

飯田家の墓地は境川の小高い丘の上にあります。お参りするには野菜の畑を抜けていきます。晩春の「葱坊主」の頃です。農事と関りの深かった「龍太の墓」には「葱坊主」が似合います。

桜蕊降るや少年ボール蹴る 森田 節子

この句のポイントは「降るや」の「や」です。この「や」は切字の「や」ではなく、「するやいなや」の「や」です。このスピード感が「少年ボール蹴る」に直結しすばやい動きを見せています。

田の神の息吹きうなじに芹摘めり 谷田明日香

「田の神」は春になると山を降り、稲の収穫まで田を守ります。作者は田芹を摘みにきたのですが、うなじを吹く風に「田の神」を感じたのです。もう降りてこられたのだと。

恋猫の舌の繰り出す水の紋 小原芙美子

「恋猫」と「水」との取り合わせは定番ですが、この句は細部を見せることで成功しました。それが「舌の繰り出す水の紋」です。この舌の素早い動きに猫の恋の激しさが垣間見られます。

たましひの揺れのはじまる夜のさくら 山田 健太

桜の樹には死者の魂が棲んでいると言った作家がいました。作者もまた、桜に「たましひ」を想い、夜になると揺らぎ始めると感じているのです。桜に対する日本人独特の想いかもしれません。

ぼうたんにぼうたんの夢白牡丹 根岸 善行

この句も先ほどの桜のように、「ぼうたん」への想いが強いです。魂と言うより「ぼうたんの精」でしょう。「白牡丹」を見入っているうちに白昼夢の世界に入り込んでいったのです。

咲き終へし水仙葉もて括らるる 仙田 孝子

このような句は実際に体験しないと作れません。自らの葉で括り自然に戻すのです。葉もそうですが、自然のものを利用することが少なくなりました。

桂郎と器の絆 亀鳴けり 津川かほる

「風土人」にとって「亀鳴く」は大事な季語です。桂郎師の「裏がへる亀思ふべし鳴けるなり」に込めて、器師には「桂郎のてのひらにゐて亀鳴けり」があります。桂郎、器の師弟の強い絆を端的に詠んでいます。

風土集



南うみを選

アネモネの朝はカフェ・オ・レクロワツサン 川崎 森田 節子

境内に咲きし五色を花御堂

桜蕊降るや少年ボール蹴る

九輪草群れ咲き水車回らざり

群れに咲き鳥翔つやうに水芭蕉

声変はりのこゑもまじりて鬼の豆 舞鶴 小原芙美子

田の神の哄笑はじけ芝ざくら

恋猫の舌の繰り出す水の紋

会ふ人のよき挨拶や復活祭

園児らのままごと菜は花の屑

花冷や雨誘ひだす杖の音 上尾 根岸 善行

手を挙げてとどかぬ高さしやぼん玉

ひと振りで万の太陽しやぼん玉

鳥交る雲の流れを堰止めて

ぼうたんにぼうたんの夢白牡丹

桂郎と器の絆 亀鳴けり 川崎 津川かほる

亀鳴くや月の兔に首伸ばし

地の奥の関の声かな茗荷竹

逃水や「恋のフーガ」てふ唄ありき

花菰は花の香葉の香たがへ咲く

陽だまりへ絶滅危惧種目高の眼 東京 中嶋 陽子

墓千匹住まふ学校蛙の子

体長は指の一節蛙の子

生温きやごの抜け殻仏生会

花冷えや使へぬボールペンの束 高槻 六車 佳奈

歯ならびのよきもの選ぶ桜鯛

藤ゆれて吾子の組成を考へる

先端はハニカム構造つくづくし

山藤やそろそろ運転替はらうか

廃校の廊下つややか春惜しむ